

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纒)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ 一間 (はざま) から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？ 一神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎—神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C. クラインと「敬神愛人」」(黒柳 志仁)

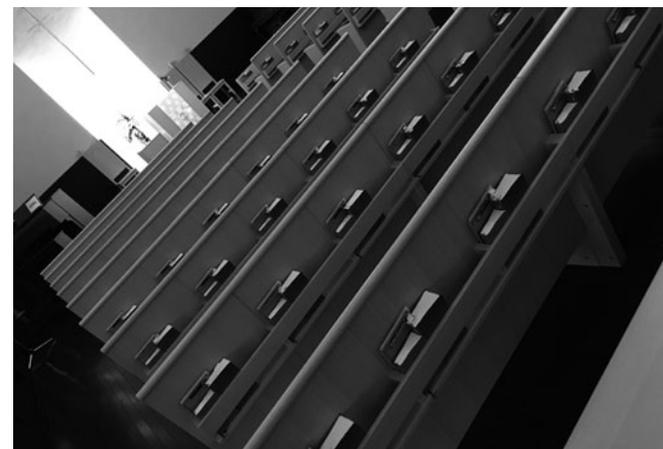
目 次

新入生の皆さんへ…………… (2)

湖畔でのバーベキュー…………… 草地 大作 (4)

他の人との繋がり…………… 荒田 啓示 (9)

愛の内実…………… ヨセフ下原太介 (12)



新入生の皆さんへ

敬神愛人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も
重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分の
ように愛しなさい。』—」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大
学の学生となられたのです。皆さんはこの大学について何をご存知で
しょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたりされるで
しょうが、ここでも少しお話したいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、
またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の「建学の
精神」は「敬神愛人」です。これは前述の新約聖書から引用されました。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛すること、
この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないとい
う、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいとい
うヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C.
Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語教育を目的として来日
しました。そして横浜に英語学校、教会をつくるなど伝道の成果をあ

げ、彼が次の着任地として妻メアリーとともに名古屋に来たのは1887年
でした。彼らは名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。
その「私立愛知英語学校」は「名古屋英和学校」と改称し、これがわが名
古屋学院大学の基となりました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神
愛人」でした。

☆

新入生の皆さん、皆さんはこれから数年間、この大学の学生として勉
強をしていくことになります。ここでは勉強ばかりでなく、人間を成長
させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自
分を愛するように他者を愛することができますように、また、人間の力
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間
へと成長を遂げることができますように。

◆ チャペルへの招き ◆

チャペルでは週に数回、チャペルアワーと称してキリスト教の礼拝を
行なっています。聖書を読み、教職員や近郊の牧師の奨励を聴き、キリス
ト教の音楽に親しみ、祈る時間です。チャペルアワーの時間を通じて、世
界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触れ、こ
れからの時代を生きていく上で大切な何かを感じていただければと考
えています。

<名古屋キャンパス>：月曜日 12:25～12:50 たいほうコミュニティリンク
火曜日 13:00～13:30 しろとりチャペル
木曜日 12:25～12:50 しろとりチャペル

<瀬戸キャンパス>：金曜日 13:00～13:30 瀬戸チャペル

☆

チャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいとき
はどうぞお気軽に利用してください。ただし、大声でのおしゃべり、飲食
は禁止です。チャペルの椅子に座り、静かに自分と向き合い、語りかけ、そ
して内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出したり、また何
か発見があるかもしれません。また、チャペルでは宗教講演会やコンサ
ートなどの様々な行事や勉強会などを行っています。

湖畔でのバーベキュー

草地大作

その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

(新約聖書 ヨハネによる福音書 21章1～14節)

皆さんは、たまたま入学した大学が、キリスト教を大切にしていると、ころであったという奇遇で、今日の礼拝に出席されていると思います。だいたい、「礼拝」に出席するなんていう機会が人生の中であると思ったこと、今まででありました？多分、無い人たちの方が多いんじゃないかなと思います。本当によろこそ、今日の礼拝に来てくださいました。皆さんと一緒にここで聖書を読むことができて、とても私は嬉しいです。

私はですね、ちょっと自己紹介をすると、来月で45歳になるんです。…おっさんですね、皆さんから見たら。多分、皆さんの親御さんぐらいの年齢かなあと考えています。ウチにも高校3年生の子どもがいるので、皆さんからすると、少し後輩の年齢ですね。今日は1年生の人が多いのかな？18歳とか19歳とか、あるいは20歳とか、1年生にもいろんな年代の方がいらっしゃると思うんですけども、その方たちにお話をしようと思って準備をして、「うわっ」と思ったんですよ。つまり、皆さん私の子どもぐらいの年齢なんだと。大学生の皆さん、大人の皆さんに、自分の子どもぐらいの年齢の方だって伝える、そういう時がきたんだなあっていう風に自分でちょっと驚いているんです。皆さんは、どうですか、だいたい名古屋の出身の方が多くいますか。ね。「栄」に教会があるって、知っています？栄って行ったことありますよね。栄の「オアシス21」と「明治生命

ビル」の間に、茶色い建物が建っているんですけども、そこが今、私の勤めている教会なんです。でも、知っている人は知っているんですけども、知らない人は知らないんですね。自己紹介をして、「あそこの栄の教会で働いています」って言うと、「栄に教会なんてありましたっけ？」って言われるんですけど、もう130年あの場所にある教会です。周りのビルが何も無かった時からずっとそこにある教会にいま私は勤めています。また栄で遊んでいるときに、場所を確認してもらって、ドアが開いていたらどうかチラッと入ってきてください。(キリスト教の授業の)点数はあげられないんですけども、教会に名古屋学院大学で働いている人たちもおられますから、「こないだ、誰々さんっていう学生さんが来ましたよ」って、ちょっと耳打ちぐらいはできますのでね、よかったらまた覗いてみてください。

ということで、今日は礼拝です。説教題は「湖畔でのバーベキュー」というタイトルにしました。なんでこんな題にしたかっていうと、さっきみんなで見ました聖書の箇所、ヨハネ福音書の21章っていうところですけども、イエスが弟子たちと一緒に湖畔でバーベキューしたってことが書いてあるからです。お話は、長い箇所になっちゃったんですけど、読んだらだいたいまあこういうことだったんだなってことが分かれると思うんですけども、私は今日

の箇所を読んで、「ああ、これは楽しいパーベキューだなあ」というのをまず思ったんですね。

キリスト教という宗教では、歴史の中に生きた「イエス」という人物が、十字架に付けられて死んでしまったことからスタートしました。ここに十字架ありますけれどもね、それはご存知だと思います、あれ、横の木に手首かなんかに釘打たれて、そして足のところにも釘打たれて、最後、呼吸困難で死ぬって言う、そういう死刑の道具ですよ。キリスト教って、ああいうグロテスクな死刑の道具をシンボルにしている、そういう宗教なんですけれども、でもそこで死んじゃったイエスという方が、3日目に生き返りました、よみがえりました、復活しましたって言う、それを信じる宗教なんです。眉唾のお話だって誰もが思います。でも、キリスト教ではそのことがとても大切な部分を占めているんですね。だから、私も復活を信じている一人なんですけれども。とは言え、やっぱり死んだ人間が生き返ると言うのは、まあ有り得ない。生命学の分野でもまず有り得ないことだし、仮死状態からの蘇生って言うのはあったとしても、完全なる肉体的死から、3日経って人が生き返るなんてこと、普通は起こらない。イエスが復活したときも、誰も最初信じなかったんです、そんなこと。誰も信じなくて一番困ったのが誰かって言ったら、イエス自身だったんですね。せっかく生

き返ったのに、誰も信じてくれない。じゃあ、どうやったら信じてもらえるか考えて、復活したイエスは、このとき、湖畔でパーベキューしようって思ったんですよ。今日のテキストの背景はざっとそんな感じです。復活したことを信じてもらうために、イエスがパーベキューを用意したって言う話なんです。

パーベキューしたことないって言う人います？パーベキュー、一回ぐらいはしたことありますよね。無い人もいるのかな、もしかしたら。パーベキューって楽しいですよ。ちょっとした、こう泡の出る飲み物なんかを片手に、火を囲んで焼いて食う。肉も魚も。そりゃ美味しいですよ、野菜も。でも、結構実は、パーベキューって準備大変なんですよ。やったことある人は分かると思うけど、だいたいね、炭に火をつけるところにいくまでが大変。今は、着火剤とか文明の利器がありますから便利になりましたけれども、それが無いときはどうやって火をおこしたかって言ったら、見たことあります？木と木をこすり合わせて、藁に火をつけて、煙がモコモコって上がってきて、それに火をつけて、それでやっとな火がおこるって言う、そういう時代ですよ、今から2000年前ってね。想像してみてください、ライター無いんです。ライター無いところからパーベキューの準備するって、すごい大変だったと思うんですね。しかもこのとき、湖の畔ですよ、湖の畔だから湿

気も多い。そうすると、本当大変だったんですけど、でもイエス様は復活した自分のことを信じてもらうために、火をおこして、弟子たちが湖の岸辺近くまで帰ってくるのを待っていたって言うお話なんですよ。

一番、イエスの復活を伝える物語の中で、生き生きしている物語がこれだなんていう気がします。まあ朝イチでパーベキューですから、ちょっと胃袋がもたれるし、弟子たちには辛かったかもしれませんが、焼き魚とパンで朝食が用意されていたと。弟子たちは嬉しかったと思うんですよ。12節が私「良いなあ」と思うんですね。こう書いてあります。「イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と聞いたがそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」こういう記述になっている、最初は信じていなかったのに。楽しい食事、湖畔でのパーベキュー。美味しかったろうなあと思います。

こうして復活の物語は、人々に伝えられていった。ちょっとだけでも「復活はリアルに起こったことなんだ」というのを感じてもらえればなあと思って、今日のお話を準備しました。新年度が始まって半月です。1年生は名古屋学院大学に入学してまだ2週間ほどですかね。私も大学生をしていたことがあるんですけど、いろいろ思い出します。本当に有意義な時間でした、大学生の時

間って言うのは。いま振り返っても、人生の中で、とても楽しい時間でした。皆さんはその時間の中にいるんですよ、羨ましいですね。私、もし時間を戻せるんだったら大学生の時に戻りたいなって時々思います。「あのとき失敗し、別れてしまった彼女ともう一度うまいことやり直したい…」とかいろいろね、想像しながらね、あ、でもまあ今は幸せにしていますけど。でもなんとなく、大学時代って、いろいろ良い思い出が残っています。そう言って、勉強いっぱいしたわけじゃないんですよ。アルバイトしたり、飲みに行ったり…あ、未成年の人は飲みに行っちゃダメですけどね、ちょっと恋愛したりね、いろいろでした。今日はその頃からの知り合いの方がおられたりするのですね、ここで先生をされている方なんですけど、僕の大学時代を知っている人もいらっしゃる。

どうか、良い大学生時代、学生生活を送ってほしいなと思います。まあ、たまたま偶然、望むと望まざるとに関わらず、皆さんは本当に不思議な縁で、キリスト教主義の大学に入りました。せっかくですから、キリスト教についての知識もまた深めるような時間を過ごしてもらえたらいいなと思います。クリスチャンなんて、日本の中では圧倒的少数で、1%もいないんですよ、全部の教派を足したって。だけど世界では、良し悪しを別にして、3人に1人がクリスチャンなんです。今、世界で2015年の数

字だったけど、22億5000万人クリスチャンがいます。ざっと3人に1人がクリスチャン、それが今の地球の状況です。数年後には、大学を卒業して社会に出ていく皆さんです。こんな時代に、日本人とだけ接点を持って生活するってことはまあ無い。海外に出かけることもあるでしょう。キリスト教がどんな宗教なのか、何を大切にしているのか、知識があるだけでもラッキーなことって必ずあります。将来どこかでクリスチャンに出会ったら、「復活したキリストは、弟子たちと湖畔でバーベキューしたことがあるんだそうですね」って話してみてください。そして、「ほお、あなた聖書読んでるんですね」っていう話になるかなと思います。

有意義な学生生活を過ごしてください。そして、せっかくこういう機会

(くさち だいさく 日本キリスト教団 名古屋中央教会牧師 2018.4.17 チャペルアワー奨励)



があるので、キリスト教についての知識も身につけて、社会に羽ばたいていってほしいなど、そんなことを、親父世代の私は思います。イエスの復活を大切にしている宗教、それがキリスト教ですってということもまた心に留めて過ごしてもらえたらと願います。では、お祈りします。

神さま、今日は名古屋学院大学で学生の皆さんと一緒にお昼の礼拝ができたことを感謝します。どうぞ、皆さんの学生生活が有意義な時間となりますように、神さま、お導きください。復活したキリストが、弟子たちのためにバーベキューを準備して下さったテキストを示されました。配慮とユーモアに満ち溢れたイエス様の姿を心に留めさせてください。この祈りを、イエス・キリストの御名によっておささげします。アーメン。

他の人との繋がり

荒田啓示

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。

(新約聖書 マタイによる福音書 7章7～12節)

全く関係ないんですけれども…、今日ここの学校に来るときに、ま、車でね、来たんですけれども、前をトロトロトロ…と走る車があって、「チツ、おっせえなコイツ」と思って、抜かしていったわけ、スツとね。そして、ふとその車を横目に見たら、めっちゃ怖いおっさんがこっちを見とったわけですよ。顔は、だいたい“遠藤憲一”ぐらいの怖さ、で、身体が“栃乃心”みたいな、そんな人にガツと睨まれて、オレァもうサツと、見て見ぬふりをして来たわけなんですけれども、そんな怖い体験をしてこの学校に来ました…というだけの話です。

はい！…ということで、今日のお話をさせていたくださるんですけども。先ほど読んでいただいたマタイの7章7節から12節ですね。注目するポイントは、最後の1節部分だけです。「人にし

てもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」この部分だけ注目していただければと思います。これは、「イエスの黄金律」と良く言われる個所で、他の宗教(仏教、儒教、イスラム教…)にも似たような、この「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という教えが他の宗教にも似た部分がある、そういう重要な個所なんですね。キリスト教も含めて、宗教っていうように聞くと、なんかこう入り込んで、自分中心の、自分のためっていうイメージが、どっかね、少しはあるかもしれないんですけども、こうした今日の12節読んだように、他の人との関係について教えている部分っていうものが、実は、聖書の中には結構あるんですね。キリスト教というのは、宗派を問わず、多くの人との関わり、交わり、共同体ってい

うものを大切にする宗教です。ですので、このような、他の人との関係について教えている箇所というのは、すごく大事な部分になります。こうした箇所というのは、現代の私たちが読んでも、特に理解しやすい、納得しやすい、そういった部分になると思います。聖書ができて、約2000年前ですね。時代が変わっても、こうした人間関係における問題であるとか、あるいはその教えっていうものは、基本的にいつの時代も変わらないんだなあということが、この箇所からも少し分かるのではないかと思います。いつの時代も、同じようなことで「ああ人間ってというのは悩んでいるんだなあ」ということが分かるんじゃないでしょうか。

だからこそ、いつの時代であっても、人生のいつの段階においても、悩みとなる、問題となり得る、こうした人間関係、他の人との繋がり、関係、そういったものについては、やっぱり色々これから生涯をかけて、自分たちそれぞれ考えていかなければならない部分なんだと思います。

しかし、他の人との関係といっても、世界にはまあ多くの方がいます。様々な人間がおります。国も違えば、文化も違う、言語にも違いがあると。そうした人たちといかに交わっていくか、というところが大事になります。日本の中でも、地方によっては、文化も違う、方言もある。色々コミュニケーションにおいても、違いが出てきます。

僕、4年ぐらい前に、東日本大震災の復興ボランティアで、宮城県の南三陸町というところに行ってきました。そこでは、農業・漁業のボランティアを含めて、仮設住宅に住んでいるおじいさん・おばあさんたちの話し相手に

なる、いわゆる“傾聴サービス”のようなものをボランティアとしてやってきたんですが、はじめて行った東北、宮城県、その次の日、いきなりそのおじいさん・おばあさんたちと一緒にちょっと話し相手になってくれということと言われて、行ってきました。そうしたら、まあまったく言葉が分からないんですね。やっぱり方言、東北弁。全然言葉が違う。で、そうやって色々話をしていた中で、「はあん」と（方言が分からないので話を適当に）合わせて、愛想笑いしていたわけですが、そこで、何かの話の中で、なんかおばあちゃんたちが「おしよすいなあ」「おしよすい」って言い始めたんですね。はあ？お小水？と思って…。え、ションベンか？と思って…。いきなりここでションベンの話もってんなよ！と、ちょっとびっくりして、他のスタッフに聞いたんですよ。「おばあさん、いきなりなんかお小水とか言い始めましたけど、トイレって大丈夫なんですか？」とか、こう聞いたわけなんです。そしたら、「おしよすい」ってというのは「恥ずかしい」という意味だったんですね。…オレが一番恥ずかしいわ！と思ったんですけれども…。やっぱり方言の中でも、東北とかになると、言葉がまったく違って、普段私たちがとっているコミュニケーションと、まったく誤解を生んだようなそういった形も、方言の中では出てきてしまう。同じ日本なのに、これだけの誤解を生んでしまうかと、そういうこともやっぱりあるわけですね。

現代では、日本に限らず、本当に世界的に、多国籍化っていうかですね、いろんな国の人、そしていろんな考え方、生き方の人を受け入れていこう、あるい

は推進していこうと、そういう流れが、今の時代にあると思います。それは大いに結構なことなんですけれども、しかし、それだけ多くの方が多くの人と交わるということは、必ずそこに人間同士の問題っていうものが生じてくるわけです。学校一つとっても、小さいグループ内でも、色々ないざこざというものも必ず起こるわけがありますけれども、これからも人生にはそうした問題にはたくさん直面していくと思います。そんな中で、やっぱり他の人とのつながり、関わりにおいて、この基本の基本となるもの、そうした考え方が、今日のこの福音箇所、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉にあるのだと思います。言い換えれば、人にしてほしいということ、自分もするなよ、相手には、と。本当に小学生でも分かるような言葉。多くの人、いろんな考え方の人と交わっていく中では、こうした一番の基本的なところ、ここに人間関係、他の人との繋がりを中心とするポイントがあるのではないかと思います。よくね、小学生の時に、人にちょっかいを出してね、先生に「相手の気持ちを考えろ」と、良く怒られていた記憶もありますけれども、同じことですね。こうした基本的な部分が、人間関係には大きな影響を持つのであると、今日はこのことだけを覚えていってほしいなと思います。

この大学では、聖書を読む機会というものがあということ、他の大学にはなかなか無いことだと思います。そんな中で、自分の今、生きているなかで、身近に感じるような言葉、聖書を

(あらたけいじ カトリック神言修道会助祭 2018.10.12 瀬戸チャペルアワー奨励)

読んだ時に、「ああ、今日読んだこの言葉ってというのは、自分たちの中でも、なんか、なんとなくわかるな」と、そういったことが少しはあると思います。そうしたところに注目していくと、やっぱり他の人との繋がり、他の人との関係についての箇所が多いと思います。今日の箇所以外でいえば、たとえば、「己のごとく人を愛せよ」というものがありますが、生きていく上で、自分たちは必ず他の人と関係をしていきます。それぞれのコミュニケーションの方法であるとか、そういったものは様々ではありますけれども、そんな中でもやっぱり一番人間関係の上で大事にしていかなければならないこと、それは何ですか？という時に、今日のこの箇所が答えになると思います。

そういうわけで、今日はこのマタイ7章の一番最後、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」言い換えれば、「人にしてほしいことは、自分も相手にはしない」。この箇所だけ、心のどこかに留めていて欲しいなと思います。

父と子と聖霊との御名によりて。主イエスよ、今日読んだ福音から私たちが学んだこと。多くの方が生きているこの世の中で、人と繋がる、人間関係を育んでいく。そうした上で大事なことを一つ私たちに与えてくださいました。私たちがこの言葉をいつも忘れることなく、いつでも自分たちの生き方の一つの指針としていくことができますように。

私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。

愛の内実

ヨセフ下原太介

(身に着けたストールを掲げ、指差しながら…)皆さん、このストールの色は何色でしょうか？(会衆席から「赤」と声が上がる)。では、赤以外に見える方いらっしゃいますか？…確かに真実の一つです。殆どの人はこれを「赤」と呼ぶかもしれませんが、しかし、ある人は「えんじ色」と呼ぶかもしれない。また、ある人は「紅」や「深紅」と呼ぶかもしれない。または「赤」に見えていても、「えんじ色」と呼びたい、「紅」や「深紅」と表現したいという思いの人もいるかもしれません。

実は、キリスト教の中で異なる教派が存在するという事は、同じものを信じていることは大前提としつつも、見方・見え方が違う、表現の仕方が違う、捉え方が違う、強調するポイントが違うとか…、もしかしたら、単にそのような違いに過ぎないのかもしれませんが、しかし、私たち人間、また、キリスト教や様々な宗教、そして国々は“違う”ということに心を奪われ、長い歴史の中で、否定し合ったり、拒否し合ったり、争い合ったり、そんな悲しい歴史を繰り返してきました。

近年、その悲しい歴史の教訓から「エキュメニカル」という思想が大切にされています。“それぞれの違いを認め、受け入れ、越えて、同じ神様を

信じているということにもう一度、心に向け、兄弟姉妹としての一致を求めましょう”というものです。

私たち人間は、残念ながら“違い”に心を奪われ易い生き物です。キリスト教の各教派もそうです。しかし、違いを認めることよりも、違いを受け入れることよりも、そして、違いを乗り越えるよりも、もっともっと大切に、根本的なことがあります。それは、“様々な部分で違っているとしても、根本的には同じ、本質的には一致していること”ということです。

私たちはそれぞれ、教派が違う、組織が違う、礼拝の仕方が違う、お祈りの内容や言葉遣いが違う、表現の仕方が違う。でも、過去・現在・未来に亘って、何があっても、決して違わない部分があるのです。それこそが私たちの信仰の本質です。

それは、神を信じ、その生涯において神の愛の中を歩み、そして、その愛を他の人々に伝えていく。神に愛され、神を愛し、そして、人を愛し、人に愛される。私たちの中に存在する、この愛の思想と愛の歴史に、絶対に違いはありません。私たちにとって、本当に必要なことは、“違いに目に向け、違いを認め、違いを受け入れ、違いを乗り越えていこう”ではありません。私

たち一人ひとり、違って当然です。大切なのは、“私たちはそれぞれ、一見違ってはいても、しかし、やはり同じである”ということを見失ってはいけないということです。

キリスト教は、どんな教派があっても、どんな違いがあっても、どんな人々がいたとしても、愛に根差して生きてきた、生きている、生きていくということは絶対に違いません。

「エキュメニカル」という思想・動き・希望を思う時、いつも私は、この“違うことに心を奪われるよりも、本来、私たちは同じである”ということに気が付き、そこからキリスト教の中に生きる全ての人々の関係を確認するものにしていく必要を感じます。私たちは、神の愛によって過去から未来永劫に亘って一致しているという真実こそ、「エキュメニカル」の根本ではないでしょうか。

それでは、様々な違いの中にあっても、常に私たちを一致に導く“神の愛”、“愛”とは一体、何なのでしょう？私も「名古屋柳城短期大学」という、保育士・幼稚園教諭や介護福祉士を目指す学生と普段、交わりを持つ時があります。また、かつて、その大学でチャプレンをしていた経験もあり、その働きの中で、学生たちに必ず話すお話しがあります。

それが、愛についてです。先ほど、私は皆さんに「神の愛に基づいて、私たちは絶対に同じである」とお話ししましたが、それでは、そもそも「愛」とは一体何でしょうか？「愛とは何

ですか？」と問われて、「はい！私、答えられます」という方、いらっしゃいますか？それでは、今日に至るまでに、「愛とは、何か？」という問いについて思いを馳せたことのある方、いらっしゃいますか？“今、知らない司祭が来て、いきなりこんなこと言っているけど、正直、今まで考えたことなかった”という方々が、もしかしたら殆どかもしれません。

私たちは日常生活の中で「愛」という言葉を実によく耳にしたり、使ったりしています。にも関わらず、“愛とは一体、何か？”“何をもって愛と呼ぶのか？”、実際、これらの問いを真剣に考えたことがないまま、“中身の無い愛”、“空虚な愛”を使い古しているのかもしれない。

今日は、“愛とは一体、何か？”、“何をもって愛と呼ぶのか？”、殊に“キリスト教が私たちに伝えようとする愛とは一体、何か？”について、一緒に考える時間を持ちたいと思います。

英語で“I love you”という言葉があります。おそらく、ここにいらっしゃる全ての方々が、これを日本語に訳すことができると思います。そして、その訳は、疑うことなく「私はあなたを愛している」のはずです。しかし、今日は皆さんに「愛」という日本語を使わずに“I love you”という英語を日本語に訳していただきたいと思います。“I love you”という英語を「愛」という日本語を使わないで、つまり「私はあなたを愛している」以外の言葉で訳す。皆さん一人ひとり、

どう訳すでしょうか。少し考えてみてください。

…いかがでしょうか。もしかしたら、ある人は「私はあなたのことが大好きです」と訳すかもしれません。また、ある人は「私はあなたとずっと一緒にいたい」と訳すかもしれません。また、ある人は「私はあなたのことをずっと、ずっと考えている」と訳すかもしれません。また、ある人は「私はあなたなしでは生きられない」と。皆さんは、どう訳したでしょうか。今、私が挙げた中で、同じ訳があったという方、いらっしゃるますか？また、それ以外の訳をしたという方は？

本当に大切なことは、普段私たちが安易に、いとも軽々しく用いている「愛」という言葉の、その中身・内実なのです。用いる言葉は同じでも、ここにいる私と、隣にいるあなた、目の前にいる皆さん同士では、「愛」の表現の仕方、認識の仕方、全く違うということです。私たち一人ひとりがいつも口にする愛、伝えようとする愛に中身があるか否かが、今、問われています。

ここで、一人の青年の話をしたしたいと思います。その青年には、とても大好きな恋人がいました。青年は、その彼女のことを“運命の人だ！”、“生涯、一緒に過ごしていく人だ”、“自分にはこの人しかいない”と確信していました。そして、お互いに結婚することを誓い合っていました。しかし、そのような関係であっても、若い二人は、特に彼女の方は、時折、お互

いの気持ちに不安を感じる時がありました。そして、彼女は彼に、こう尋ねました。「ねえ、私のこと愛してる？」と。その彼女の問いに、彼はいつも、ただ「うん」と頷くだけでした。そして、また時が経って、彼女が同じ質問をする。「ねえ、私のこと愛してる？」。彼は、また頷くだけ…。

実は、彼は悩んでいました。彼女に「ねえ、私のこと愛してる？」と問われるたびに、“愛”って、一体なんだろう？僕にはこの人しかいないと思うけど、一生一緒にいたいと思うけど、「愛」ってそういうものなのか？僕はもっと彼女を大切にできる。もっと、もっと優しくできる。もっと、もっと、もっと彼女に相応しい相手にならなきゃいけない。僕は本当に彼女のことを愛していると言えるのか？もっと優しくできた時、もっと大切にできた時、もっと相応しい相手になれた時、僕は彼女に「愛してる」と言えるんじゃないか。今の自分は、彼女に対する愛には不十分では？」と。だから、彼は彼女の「ねえ、私のこと愛してる？」という問いに、「愛してるよ」と言えなかった。自分の愛に自信が持てなかった。愛そのものが何であるのかに確信が持てなかった。

言い換えれば、彼はそれだけ、彼女に対する「愛」について真剣だった、彼女に対する「愛」の中身・内実を心から考え、それをしっかりと伝えようとしていたということです。だから、悩んでいたのです。自分の気持ち

が、本当に「愛」と呼べるに値するものなのか分からない。でも、「愛してない」という返事も、きっと間違っている。だからこそ、彼は、ただ頷くことしかできなかったのです。

しかし、そんな時、彼のこの悩みに思わぬ形で答えが与えられました。ある日、彼女は事故に遭い、二度と会えなくなりました。彼は、彼女の動かなくなった手を握って、こう思いました。こう願いました。“もし僕が60歳まで生きるなら、30歳まででいい。残りの30年を彼女に与え、その人生を彼女と共に過ごしたい。自分の命を彼女に分け与えたい。”彼はそう願い、祈りました。そして、冷たくなった彼女の唇に触れながら、初めて「愛してるよ」と言いました。

その彼なら、“I love you”という英語をどう訳すでしょうか。彼なら、こう訳すはずです。「私は、あなたのためなら死ぬる」、「私は、あなたのためなら自分の命でさえいとわない」と。これが、彼の探し出した愛の内実です。

“I love you”という英語をどう訳

(ヨセフ しもはら だいすけ 日本聖公会中部教区 主教座聖堂名古屋聖マタイ教会 主任司祭 2018.10.30 Reformation & Ecumenical Week チャペルアワー奨励)

すのかは、人それぞれです。何が正しいのか、その正解は決して一つではありません。その答えは違っていい。一人ひとり違うのが当たり前なのです。しかし、大切なのは「愛」が一体何であるのかを、本当に真剣に、その生涯をかけて考え、見つめ続けていくことです。

ここにいらっしゃる皆さんは、これから誰かに愛され、誰かを愛し、誰かに愛を誓って生きていくはずで。その時、あなたが誓うその愛に中身があるかどうか、それが大切なのです。

そのような私たちに対して、主イエス・キリストはまさにその生涯を通して、言葉と行ないによって、愛の模範を示してくださいました。私たちのために命を捨てるという、その愛を。

皆さんが、その生涯の中で、これから語る愛の一つひとつに中身のあるものであるように、いつも祈っています。